E-6　なぜ指示詞はつねに複数の代替形と統語範疇を有するのか

平田　未季，趙　文騰，デ・オリベイラ・パイバ・ドウグラス・エンリケ（北海道大学）

【要旨】
指示詞は，通言語的に，共通の語根から派生した複数の形式および統語範疇を含み，閉じられた体系を形成している。これは指示詞と他の言語表現を区別する顕著な特徴であるが，なぜ指示詞が言語普遍的にこのような体系を形成するのかについて議論した研究は，管見の限り見当たらない。本発表では，指示詞が持つ「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」機能に注目し，共同注意場面における日本語・中国語・ブラジルポルトガル語指示詞の使用を分析した。その結果，「注意の転換」「注意の調整」「共同注意の確立後」の各場面において，指示詞および指示詞を含む発話タイプが切り替えられることによって，相手に提供する指示対象についての情報内容と量が調整されていることが分かった。どの言語においても，話し手は，複雑な共同注意場面で相手の注意の向きを効率的に調整するために指示詞の体系性を利用している。この結論は，指示詞の体系性が，効率的に共同注意を確立するために，使用場面の中で形成されていった可能性を示唆している。

1. 研究の背景と目的

1.1 指示詞の重要性

指示詞は，言語哲学および古典的な語用論において，代表的な直示表現として理論的な重要性を持ち，数多くの分析がなされてきた。近年は，指示詞が持つ「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」（Levinson 2018: 2）機能が注目され，使用場面に基づく分析が活発に行われている。

指示詞は，どの言語でも最も使用頻度の高い語の 1 つであり，幼児が最も早く習得する語の 1 つでもある（Diessel 2006）。さらに，その使用において，ほぼ常に，幼児が前言語期のコミュニケーションで用いる指さしジェスチャーと共起する（Tomasello 1999）。Levinson (2018) は，‘here and now’ に拘束される指示詞と指さしは，動物のコミュニケーションと密接につながっており，言語の古代の基質（an ancient substrate of language）とも言える存在であると述べている（同上，pp. 2-3）。

1.2 指示詞の定義

では，どのような言語表現が指示詞と定義されるのか。初期の語用論では，指示詞は，他の直示表現と並行する形で，意味的な側面から定義されていた。すなわち，指示詞とは，直示中心（deictic center）とそこからの相対的な空間情報を示す表現の集合である（Fillmore 1971, Levinson 1983 など）。しかし，その後，指示詞の使用場面に注目が集まるにつれ，実は多くの言語において空間情報を持たない指示詞が存在することが明らかになってきた。そこで，2000 年前後から，使用場面で指示詞が果たす伝達機能に基づく定義がなされるようになった。すなわち，指示詞とは，(i) 指示対象を発話空間に定位する（space orientation）機能に加えて，(ii) 聞き手の注意の焦点を調整する機能を持つ言語表現の集合である（Diessel 1999, 2006; Levinson 2004）。これらの 2 つの機能は相互に関連し合いながら，実際の使用場面で，「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」ことを達成している。

しかし，この伝達機能に基づく定義も，指示詞を他の言語表現から区別するには不十分である。「上」「右」などの空間直示表現のように，直示中心と空間情報を意味として持ち対象を空間定位する言語表現は指示詞以外にも存在するし，「ほら」などの注意喚起表現のように，ジェスチャーを伴い聞き手の注意を周囲の環境に向けさせる言語表現も存在するからである。では，指示詞を他の言語表現と区別しうる特性とは何なのか。フィールドワークによって様々な言語の指示詞を記述してきた Levinson et al. (2018) は，指示詞はその形態的・統語的特徴によって，他の言語表現と区別可能だと述べる。指示詞は，通言語的に，共通の語根を持ち，そこに異なる形態素が組み合わされることで形成される対照的集合（contrast set）を含む。さらに，それらの

形式が節内の様々な統語的な位置に現れる。このように，指示詞は，どの言語においても，共通の形態的・統語的特徴を持ち，閉じられた体系を形成している（Levinson 2018: 4）。

1.3 指示詞の体系性とは

指示詞の体系についてより具体的に説明すると，それは以下の 3 つの要素からなる（Diessel 1999）。

(1) 直示素性（deictic feature）：上述の (i), (ii) の伝達機能に関わる情報を示す。体系内で生産性を持つ語根となることが多い（直示語根 deictic root; 日本語の場合，コ-，ソ-，ア-）。

(2) 質的素性（qualitative feature）：事物・位置・人，有生性もしくは性・数など指示対象を類別する情報を示す。直示語根に派生接辞が付く，もしくは語が屈折するなどして表される（日本語の場合，-レ, -コ, -ッチ, -イツ, -ラなど）。

(3) 統語素性（syntactic feature）：その形式が現れる統語的な位置情報を示す。直示語根に派生接辞が付くことなどで表される（日本語の場合，-ノ, -ウ, -ンナなど。ただし，(2) の-レ, -コ, -ッチも「代名詞」という統語素性を示す）。

本発表が分析対象とするのは (2) の質的素性および (3) の統語素性である。類型論的な指示詞研究によると，どの言語の指示詞も，ほぼ常に事物（object），位置（location），方向（direction）という 3 つの質的素性を含む。また，どの言語の指示詞も，ほぼ常に代名詞，決定詞（determiner），副詞として用いられる形式を持つ。指示副詞は，位置・方向などの空間情報を表す場合と（英語の *here, there* など），様態（manner）を表す場合に分かれる（日本語のコウ，ソウ，アアなど）。指示代名詞と指示決定詞は，80%の言語で同形式である（英語の *this, that* など）が，さらにごく一部の言語では，同一の形式が，代名詞，決定詞，副詞，同定詞すべての位置に現れる（Guugu Yimidhirr 語の *yarra*, *yarrba* など, Haviland 1979）。

1.4 問題提起

指示詞体系を形成する (1)-(3) の要素のうち，これまでの指示詞研究では (1) の直示素性のみが活発に分析されてきた。1.1 節で述べた指示詞の最も重要な機能である「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」役割を果たすのは (1) の直示素性だとされており，1.2 節で述べたこれまでの指示詞の意味的な定義および伝達機能面からの定義も，直示素性の分析から生まれたものであった。一方で，指示詞の顕著な特徴である質的素性・統語素性についての分析はほぼなく，指示詞体系が質的素性・統語素性を示す要素を含むことと，指示詞が共同注意確立のために重要な機能を果たすことは統合的に考察されてこなかった。特に，統語的な側面については研究が少ない。従来の個別言語の指示詞研究では，分析対象を指示代名詞もしくは指示決定詞に限定し，指示副詞などその他の統語範疇の存在を分析の外に置くことが多かった。

1.5 本発表の問いと目的

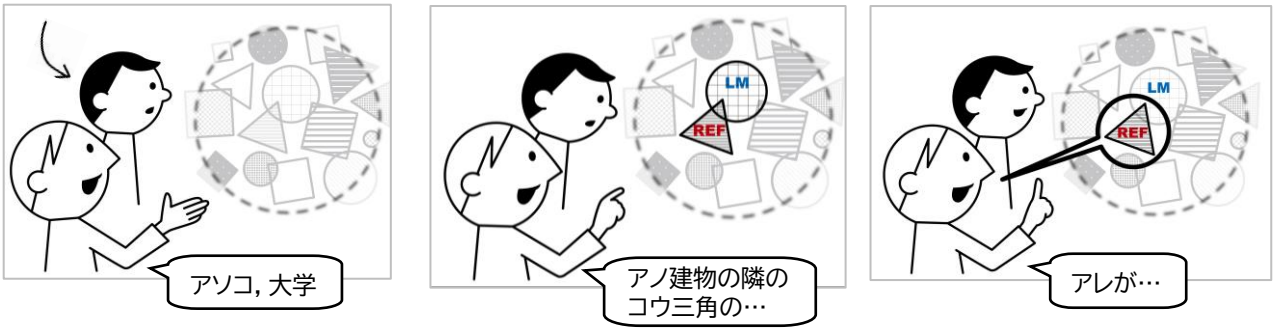
上述の通り，従来の指示詞研究では，直示素性については多様な分析が行われているが，指示詞体系が質的素性・統語素性を示す要素を含むことは単なる事実として指摘されるにとどまっている。本発表では，直示素性のみならず，質的素性・統語素性もまた，「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」という指示詞の最も重要な機能を果たすために，指示詞体系が有する特徴だと考える。この想定を検証するため，平田（2016, 2020）に基づき，実際の共同注意場面におけるやりとりを分析する。

2. 共同注意場面でみられる 3 つの指示タイプと指示詞の分布

従来の指示詞分析では，「それは私のです」「あそこが私のうちです」というような単独の発話が分析対象となってきた。これらの指示では，指示と同時に共同注意が確立することが想定されている。これに対し，平田（2016, 2020）は，実際の共同注意場面で生じるやりとりを談話レベルで分析し，Butterworth (1995) を参考に共同注意場面で行われる指示を以下の 3 つのタイプに分類したうえで，それぞれの場面で選択される指示詞の形式に一定の傾向があることを明らかにした。以下，3 つの指示タイプと指示詞の選択傾向について概説する。

(4) 共同注意場面における 3 つの指示タイプ

a. 注意の転換（atttention-switching）b. 注意の調整（attention-coordinating） c. 共同注意の確立後



2.1 注意の転換

(4a) の指示は，指示対象が相手の視野に入っていないと話し手が判断した場面で行われる。話し手は，指示によって，相手の頭・顔・目の向きを動かし，相手の視線を指示対象が存在する空間に向けさせようとする。この指示では，手さしや腕を伸ばした指さしなどの大きなジェスチャーとともに，位置や方向を示す空間指示代名詞（-ッチ，-コ）が選択される傾向がある。

2.2 注意の調整

(4b) の指示は，相手の視野内に候補となりうる対象が複数含まれると話し手が判断した場面で行われる。話し手は，複数の候補の中から意図する指示対象を相手に検出させるため，ランドマークとなる対象および指示対象自体について，言語的な描写や図像的ジェスチャー（iconic gesture）といった非直示的な情報，(4a) よりも精密に対象の位置を指し示す指さしによる情報などを提供する。これらの情報には指示詞が付加されるが，その際，言語情報には名詞句と統語的に共起可能な決定詞（-ノ）が，図像的ジェスチャーには様態を表す副詞（-ウ）が付加される傾向がある。

2.3 共同注意の確立後

(4c) の指示は，相手の反応・発話から，相手の視覚的注意が意図する対象に向けられていると判断可能な場面で，その共同注意が確立した対象を後続の談話に持ち込む際に行われる。多くの場合，指さしなどのジェスチャーは停止される。加えて，これまでの活動との切り替わりを示すため，指示詞の形式が切り替えられる。この時，指示詞の中でも最も情報量が少ない指示代名詞（-レ）が選択されることが多い。

2.4 問題点

以上のように，平田（2016, 2020）では，指示詞体系に含まれる質的素性・統語素性が，相手の注意の調整と共同注意の効率的な確立に深く寄与していることを示した。しかし，以上の結論は日本語指示詞の分析のみから導かれたものである。本発表では，日本語と語族・構造が異なる他の言語においても，指示詞が持つ質的素性・統語素性が「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」ことに寄与しているかを検証する。具体的には，日本語に加え，日本語と語族・構造が異なる中国語・ブラジルポルトガル語を分析対象とし，それぞれの共同注意場面におけるやりとりの中で指示詞の体系性がどのように利用されているのかを日本語と比較しながら分析する。

3. 分析

3.1 日本語・中国語・ブラジルポルトガル語の指示詞体系

分析対象である日本語・中国語・ブラジルポルトガル語の指示詞体系を表 1-3 に示す。3 つの指示詞体系の共通点は，いずれも代名詞・決定詞・副詞という 3 つの統語範疇を含むこと，事物・位置・方向という 3 つの質的素性を含むこと，指示代名詞（の一部）に複数性を表示する接尾辞が付加可能なことである。統語範

疇に関する主な違いは，ブラジルポルトガル語の副詞は代名詞･決定詞とは異なる体系を形成していること，日本語は代名詞と決定詞の形が異なるが中国語・ブラジルポルトガル語は同形であることである。質的素性に関する主な違いは，以下の 3 点である。まず，ブラジルポルトガル語には性の一致があること，次に，位置・方向という空間情報が日本語・中国語では代名詞で，ブラジルポルトガル語では副詞で表されていること，最後に，日本語・中国語の指示副詞は様態を表すが，ブラジルポルトガル語には様態を表す指示詞はないことである。

表 1 日本語指示詞体系

統語範疇	質的素性			
PRO	object	これ(ら)	それ(ら)	あれ(ら)
	location	ここ(ら)	そこ(ら)	あそこ(ら)
	direction	こっち/こちら	そっち/そちら	あっち/あちら
DET		この+N	その+N	あの+N
DET	manner	こんな+N	そんな+N	あんな+N
ADV	manner	こう	そう	ああ

PRO: Pronoun
DET: Determiner
ADV: Adverb
N: Noun
括弧内は複数性の表示

表 2 中国語指示詞体系

統語範疇	質的素性		
PRO	object	这/这个(这些)	那/那个(那些)
	location	这里/这儿	那里/那儿
	direction	这边	那边
DET		这/这个+N	那/那个+N
DET	manner	这样的+N	那样的+N
ADV	manner	这样	那样
		这么	那么

表 3 ブラジルポルトガル語指示詞体系

統語範疇	質的素性			
PRO	object	masculine	esse(s)	aquele(s)
		feminine	essa(s)	aquela(s)
		non-variable	isso	aquilo
DET	masculine		esse(s)+N	aquele(s) +N
	feminine		essa(s) +N	aquela(s) +N
ADV	location	aqui	aí	ali
	direction	cá	-	lá

3.2 データの概要

日本語・中国語・ブラジルポルトガル語の 3 言語において，友人関係にある母語話者 2 名に，地上 38 階の展望室で 1 時間ほど雑談をしてもらい，その様子を録画・録音した。いずれの組にも以下の指示を与えた。

「展望室の中を歩いて，窓の外の景色・建物について話してください。※もちろんほかのことを話しても構いません」

‘Walk around the observatory and talk about the scenery and buildings outside the window. *Of course, you may talk about anything else.’

3.3 分析対象

雑談の開始前・終了後の数分を除いた 50 分間のデータを分析対象とした。この 50 分のデータから，指示以前の対話相手の頭や視線の向き，話し手の指さしなどの直示ジェスチャーの開始・終了，それまでの活動との切り替わりを示す言語行動を指標として， (4a)の「注意の転換」，(4b)の「注意の調整」，(4c)の「共同注意の確立」と解釈できる断片を抽出した。それぞれの場面に含まれる指示詞を用いた指示の件数を表 4 に示す。なお，今回の分析では，単独の発話で共同注意が確立したとみなされる指示については，原則として分析の対象外とした。

表 4　3 言語の共同注意場面における指示件数

	注意の転換	注意の調整	共同注意の確立	計
日本語	19 件	31 件	14 件	64 件
中国語	8 件	18 件	5 件	31 件
伯葡語※	13 件	34 件	14 件	61 件

※ブラジルポルトガル語

3.4 分析結果

表 4 の各指示において選択された指示詞の内訳を言語別に表 5-7 にまとめた。指示詞は，指示対象に対する情報提供性が低いものから高いものの順に番号を振っている。いずれの言語でも「1」の指示代名詞は，対象に関する情報提供性が最も低いと考える。「2」の位置や方向を示す指示詞は，空間情報を含む分「1」の指示代名詞よりも，対象についての情報提供性が高い。日本語・中国語では，これに，指示詞と非直示情報を組み合わる指示決定詞と普通名詞，もしくは様態を表す指示副詞と図像的ジェスチャーの組み合わせが続くが（表 5, 6「3」），ブラジルポルトガル語では，指示代名詞と空間情報を示す指示副詞の共起が可能であるためこちらを「3」とし，指示決定詞と普通名詞の共起を「4」とした。さらに，ブラジルポルトガル語では，指示決定詞と普通名詞に，空間情報を示す指示副詞を後接するという非常に情報提供性の高い組み合わせが可能である（表 7「5」）。

表 5 日本語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	コレ	4	7	8
2	PRO (direction)	コッチ	7	0	1
	PRO (location)	ココ	7	2	1
3	DET + N	コノ建物	1	12	1
	ADV + iconic gesture	(対象の形をなぞり)コウ	0	3	1
4	PRO + ノ + N	ココノ建物	0	7	2

表 6 中国語指示詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	这/这个	5	2	1
2	PRO (direction)	这里	2	4	1
	PRO (location)	这边	1	0	1
3	DET + N	这个 建筑物	0	12	2
	ADV + iconic gesture	(対象の形をなぞり)这样	0	0	0

表 7 ブラジルポルトガル詞の分布

	統語範疇・質的素性	例	転換	調整	確立後
1	PRO	esse	0	4	3
2	ADV (direction)	cá	3	4	4
	ADV (location)	aqui	5	4	3
3	PRO + ADV	esse aqui	3	4	3
4	DET + N	esse prédio	1	10	0
5	DET + N + ADV	esse prédio aqui	1	8	1

表 5 の通り，日本語では，概ね 2 節で説明した通りの指示詞の分布傾向がみられた。以下，日本語と比較しながら，中国語・ブラジルポルトガル語の共同注意場面における指示詞の分布を，「注意の転換」「注意の調整」「共同注意の確立後」の順で説明する。

3.4.1 注意の転換

日本語では空間情報を持つ指示代名詞が選択される傾向があるが，ブラジルポルトガル語でも，指示代名詞ではないものの，空間情報を持つ指示副詞，もしくは指示代名詞と空間情報を持つ指示副詞の組み合わせが選択される傾向が見られた。一方，中国語では空間指示代名詞よりも，空間情報を持たない指示代名詞が

多く選択された。ただし，日本語・ブラジルポルトガル語では，すべての指示において，話し手・聞き手から離れた窓外の対象が指されていたのに対し，中国語の指示代名詞による指示 5 例中 3 例は，話し手が手に持っている対象の指示であった。指示対象特定にかかる難易度が，指示対象を含む空間を指すか，指示対象そのものを直接指すかの違いに関係している可能性がある。

次に，指示詞を含む発話の構造をみる。中国語では，「注意転換」場面の指示の 8 割近くが，指示詞を含む名詞句のみ，もしくは単純な同定文によってなされていた。日本語・ブラジルポルトガル語も，中国語ほど顕著ではないものの，単純で短い発話構造の使用が半数を超えた。また，どの言語においても，指示詞が発話頭という目立つ位置に置かれることが明らかに多かった。上述の通り，「注意の転換」の際，日本語・中国語では指示代名詞が，ブラジルポルトガル語では指示副詞が選択される傾向があったが，統語範疇が異なるにもかかわらず，すべての言語において，指示詞が現れる統語的位置はほぼ変わらなかった。

表 8 「注意の転換」場面における発話タイプと指示詞の位置

発話タイプ	日本語（19 件中）	中国語（8 件中）	伯葡語（13 件中）
指示詞を含む名詞句/副詞句のみ	0 件	2 件（25%）	3 件（23%）
同定文（X は Y だ）	10 件（52%）	5 件（62%）	5 件（38%）
指示詞が発話頭の位置	17 件（89%）	7 件（87%）	9 件（69%）

3.4.2 注意の調整

どの言語においても，指示決定詞と言語情報を組み合わせる情報提供性の高い形式が多く選択された。特にブラジルポルトガル語では，「指示決定詞+名詞+指示副詞」という直示情報が重複する形式の使用が目立った。日本語では，最も情報提供性の低い指示代名詞の使用も多いが，その多くは，発話場面で卓立するランドマーク指示において用いられていた（例「西?ああじゃあコレに隠れてる辺り?」）。一方，今回のデータでは図像的ジェスチャーと指示副詞の組み合わせは少なく，日本語では 3 件，中国語では 0 件であった。ブラジルポルトガル語で，図像的ジェスチャーと指示詞が共起した例は 1 例であり，その指示では，最も情報提供性の高い形式，「指示決定詞+名詞+指示副詞」が用いられていた。

指示詞を含む発話の構造については，表 9 に示す通り，「注意の転換」指示と比べると，どの言語においても，単純で短い発話の使用が減り，指示詞が発話頭に置かれる割合も大幅に減った。

表 9 「注意の調整」場面における発話タイプと指示詞の位置

発話タイプ	日本語（31 件中）	中国語（18 件中）	伯葡語（34 件中）
指示詞を含む名詞句/副詞句のみ	2 件（6%）	1 件（5%）	9 件（26%）
同定文（X は Y だ）	6 件（19%）	2 件（11%）	1 件（2%）
指示詞が発話頭の位置	15 件（48%）	4 件（22%）	10 件（29%）

3.4.3 共同注意の確立後

指さしジェスチャーの停止とともに，日本語では顕著に指示代名詞の選択が増え，対象についての新たな情報提供を停止する様子が窺えた。一方，ブラジルポルトガル語では，指示代名詞に加え空間情報を持つ指示副詞の選択も多く，空間情報の提供が続いていた。しかし，「注意の調整」場面での指示と比べると，相対的に情報提供性の低い形式が選択されていることが分かる。中国語の指示詞選択には顕著な傾向がなかった。

指示詞を含む発話の構造をみると，指示詞の情報提供性が落ちた日本語では，「注意の調整」場面での指示と比べると，単純で短い発話の割合がさほど変わらず，発話頭の指示詞の使用は逆に増えているのに対し，ブラジルポルトガル語では微減，中国語では単純で短い発話・発話頭の指示詞の使用ともに 0 件であった。

表 10 「共同注意の確立後」の発話タイプと指示詞の位置

発話タイプ	日本語（13 件中）	中国語（5 件中）	伯葡語（14 件中）
指示詞を含む名詞句/副詞句のみ	0 件	0 件	0 件
同定文（X は Y だ）	3 件（23%）	0 件	3 件（21%）
指示詞が発話頭の位置	8 件（61%）	0 件	3 件（21%）

4. 考察

いずれの言語においても，「注意の転換」指示では空間情報を示す指示詞が，「注意の調整」指示では情報提供性の高い指示詞が選択される傾向があった。指示詞を含む発話構造をみると，「注意の転換」指示では，非常に単純で短い発話が多用され，たとえその要素が主部でなくても倒置や省略などの操作によって，指示代名詞も指示副詞も発話頭という目立つ位置に置かれることが多かった。この指示は言語習得期の幼児が行う指示と類似しており，指示のプリミティブな形だと考えることができる。これに対し，「注意の調整」指示では，指示詞についての言語的情報が提供されるため，発話構造が複雑化する。指示詞も発話の中に統語的に組み込まれ，「注意の転換」場面のような統語的柔軟性が失われる。「共同注意の確立後」には，さらに文が複雑化するが，それに反比例するように，指示詞の情報提供性は低められる。中国語のみ，「共同注意の確立後」の指示場面における指示詞の使用に一定の傾向がなかったが，その場面の多くで，指示詞ではなく「它」が選択されていた。「它」は英語の‘it’のように，先行する談話内の言語的要素を指す前方照応詞であり，指示対象に関する直示情報は示さない。「它」の使用を考慮に入れれば，中国語も，日本語・ブラジルポルトガル語と同様に，「共同注意の確立後」には，指示対象に対する情報提供性を低めていると言える。

5. 結論と今後の課題

以上，3 言語のデータ分析に基づき，指示詞体系が含む質的素性・統語的素性が，直示素性と同様に「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」という指示詞の最も重要な機能を果たすことに寄与していることを示した。指示詞体系の中に質的素性・統語的素性を示す複数の形式が含まれることで，「上」「右」などの空間直示表現や「ほら」などの注意喚起表現とは異なり，指示詞は相手の注意状態を考慮しながら，対象についての情報提供の内容や量を調整することができる。

ただし，以上の結論は非常に限られたデータから導かれたものである。特に，本発表で使用した中国語データは，日本語・ブラジルポルトガル語のデータに比べ指示数が非常に少なかった。今後，さらにデータを増やし，今回の分析の妥当性について検証していく必要がある。また，実際の共同注意場面では，質的素性・統語的素性は直示素性と連動して用いられる（平田 2020）。今後は，中国語・ブラジルポルトガル語の直示素性も考慮に入れ分析を行う必要がある。また，今回の中国語データから，前方照応詞が指示詞体系内に組み込まれているか否かが，共同注意場面でのやりとりに影響を与えうることが分かった。今後，英語など，他の言語データも分析対象とすることで，前方照応詞の存在の有無，および本発表で分析することができなかった様態の副詞の有無，性数表示の有無などの相違がやりとりに与える影響についても分析していきたい。

謝辞

本研究は，JSPS 科研費（課題番号：19K13154）の助成を受け行われたものである。

参考文献

Butterworth, G. 1995. “Origins of Mind in Perception and Action.” In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 29-39. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.

Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. (Typological Studies in Language 42) Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Diessel, H. 2006. Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar. *Cognitive Linguistics* 17: pp. 463-489.

Enfield, N. J. 2003. Demonstratives in space and interaction: Data from Lao speakers and implications for semantic analysis. *Language* 79: pp. 82–117.

Fillmore, C. J. 1971. Toward a Theory of Deixis. *The Working Papers in Linguistics* 3(4): pp. 219-242.

Haviland, J. 1979. Guugu Yimidhirr. In R. M. W. Dixon and B. J. Blake (eds.) *Handbook of Australian Languages* 1, pp. 27-180.

平田未季 2016.「共同注意確立活動過程における話し手による指示詞の質的素性の選択」『語用論研究』18: pp. 28-47.

平田未季 2020.『共同注意場面による日本語指示詞の研究』ひつじ書房.

Levinson S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson S. C. 2004. *Deixis*. In Horn, Laurence R. and Gregory L. Ward. （eds.）*The Handbook of Pragmatics*. (Blackwell handbooks in linguistics 16) , pp. 97-121. Oxford: Blackwell.

Levinson, S. C. 2018. Demonstratives: Patterns and Diversity. In Levinson, S. C., S. Cutfield, M. J. Dunn, N. J. Enfield and S. Meira (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective (Language Culture and Cognition)*, pp. 1-42. Cambridge: Cambridge University Press.

Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.